# 炎の召喚士フレア、番外篇　【王城恋愛騒乱……】

Lolo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
炎の召喚士フレア、番外篇　【王城恋愛騒乱……】

【Ｎコード】
Ｎ９４５２Ｘ

【作者名】
Ｌｏｌｏ

【あらすじ】
「おい、イアリス」
「……クーファ、あんたも気付いてるのね？」
「気付かない方がおかしいぜ。それにしても、お前のようなヤツが動くとはな。コトはそれほど重大ってわけか？」
……フレアへの恋愛感情に悩み、憂鬱の極みに達したシュウ。仕事にも手が着かない。そんな彼が仕事をしないと困る者ナンバーワンのイアリスがフレアの相棒クーファと共に立ち上がる！？　周りば

っかりが盛り上がる、ド素人恋愛小説。もはや、コメディ。

# 王城恋愛騒乱１（前書き）

恋愛よりコメディの比重が高い気がします。１：９くらい。
精度の高い恋愛小説を好まれる方には危険物です。それから、立場や身分関係を大事に考える方には毒物です。
軽い気持ちでどうぞ。

# 王城恋愛騒乱１

レミュエル王国の内政が安定してきて、結果的に軍部の仕事も落ち着いた今日この頃。

フレアのところに、定期報告にやってきたのは情報局の中位役員であるイアリスだ。フレアと彼女は今まで殆ど接触が無かったが、情報局では中位役員が王国軍とのやり取りを任せられるように決められた為、最近は互いに身近な存在となっていた。
また、フレアにとってイアリスは

「公式の場以外はため口・呼び捨てでいいからね、てかお願い！」

という願いを二つ返事で引き受けてくれた貴重な相手でもある。

そんなイアリスは今日の定期報告の後、勧められた妙に高価な菓子と紅茶を口にしながらここのところずっと、切りだそうと思っていた話題を提示した。

「あのさあ、フレア」

「ん？　なあに」

口の中ですっと溶ける甘い砂糖菓子を味わってたフレアは小首を傾げる。

「単刀直入に聞くんだけどさ。あんた、シュウの事、どう思ってるの？」

「……ええ！？」

想定外の質問に、柔らかく溶けるはずの砂糖菓子が喉に詰まる。

「げほっ、ごほっ」

「何でそんなふわふわしたものが喉に引っ掛かるのよ！？」

ツッコミで有名なフレアも、イアリス……一切のボケを取り除いたツッコミ一辺倒のプロ……にかかると、ツッコミの対象になる。

「ええと、頭がよくって、魔法のセンスが高くて。時々、毒を吐くけど、基本的にはいい人で……」

「……」

「そうそう、エレイズ様とヨナ宰相を助けたんだって話、知ってる？」

「え、嘘！？　ヨナ宰相は軟弱そうだから置いといて、エレイズ様を！？」

イアリスにとっては、初耳であった。

「凄いよねえ。なんか、それを考えるとあたしが王国軍総司令官でいいのかなって思うよ」

「……それはともかく」

『あんなのがそんな地位についたら、恐ろしいわよ』

「それだけ？」

「……ん？　どういう事」

「何かこう、もっと、無いの！？」

イアリスの剣幕が恐ろしい。

「ちょっ、どうしたのイアリス！？」

「……判った、判ったわ。私が何とかするしかないのね」

「？？」

「じゃあ、失礼するわ！」

呆然と見送るフレア。

クーファは思い当たる節があり、すかさず後を追った。

「クーファ、どこ行くの！？」
「晩飯までには戻るぜ！」
「……なんなの？」

「おい、イアリス」
「……クーファ、あんたも気付いてるのね？」
「気付かない方がおかしいぜ。それにしても、お前のようなヤツが動くとはな。コトはそれほど重大ってわけか？」
何かの陰謀か策略の話をしているかのようだ。
「ええ。重症よ、あれは。そろそろ、限界かもしれない」
イアリスが語ったエピソードは以下のようなものだ。

『シュウ、……シュウ！？　ちょっと、聞いてるの？』
整理を終えた資料を渡しに来たイアリスが声を掛けるも、情報局副局長はぼーっとしている。

『何考えてるのよ、仕事なさい、仕事！』

『イアリス……』

消え入りそうな声。

『俺、もう駄目かもしれない……。うん、俺が悪いんだ。ちょっと顔が良くて、人並み外れて頭が良いくらいじゃあ駄目なんだね。そりゃ、クロウさんとかいるしね。もっとも、クロウさんにそんな気があるとは思わないけどさ。ああ、俺もクロウさんみたいにカッコイイ召喚獣を出せないと駄目なのかなあ。ユニコーンよりカッコイイって何だろうね？　不死鳥（フェニックス）とか？　でも俺の実力じゃあなあ。はああ……』

一文ごとに、発せられる強力な負のオーラに後退っていたイアリスはとうとう、ドアにへばりついてしまった。

また、別の日。

『シュウ、何してるの？』

『うん、新しい魔法式を考えてるんだ』

『そう』

ちょっと元気になったかと安心したイアリスは、聞いてみる。

『どんな魔法なの？』

『うん。使用した相手の好みが明確に判る魔法……でも難しそうでね』

イアリスが書類ごと崩れ落ちたのには、シュウは一切気付かないほど、没頭していたという。

以下、略。

「私達がどんだけ大変な目に遭ってるか！　副局長があの状態だと、全部、仕事がロザリア局長に回されるのよ！？　あの、ロザリア局長に！！」

ロザリアのサボタージュ癖は全く治癒の兆しが無いのである。

「ううむ、そりゃ深刻だし、俺もフレアの母ちゃんに宜しくと言われてるんだ」

「何とかしないと……。でも、私、恋愛経験なくってさ」

深い溜息をつくイアリス。

「カノジョ、またはカレシのいる連中にアドバイスを貰うしかねえな！」

「そうね、仲間を集めましょう」

「おう、こうなったら徹底的にやってやろうぜイアリス！」

「当然よクーファ！」

ここに、【フレアとシュウの仲を取り持って、シュウに仕事をさせよう同盟】が立ち上がった。

「でも、恋愛関係が成立してるところってある？」

「……俺は知らん。イアリス、お前、年ごろの少女だろ？　何か、そういう話とかねえのか？」

「うう……ん。ロザリア局長は、まずそんな話、全然聞かない」

「まあなあ」

クーファも最近、ロザリアと知り合ったが、彼女と上手く付き合うには相当なのんびり気質か、忍耐か、適応能力が必要だと思った。

「エレイズ様は……そういうのタブーでしょ？　前ほどじゃないっ

て聞くけど」

「だなあ」

しかも、話してくれたとて、相当重たい話になるに違いない。

「ほぼ同期のエマはもてるくせに、ウォーレン大将軍の追っかけやってるから」

「あいつか！？　なんつーか、苦労するな、その嬢ちゃん」

ウォーレンの女性関係に関するゴシップは、侍女達の大好物である。

「リザ副官は、その大将軍の所為で恋してるヒマなんて多分ない」

「クロウさんは、ウォーレン大将軍とは逆に真面目すぎて恋人が出来ない」

「よおく判るぜ」

多分、愛の告白を受けたら４５度の礼で

「恐縮です」

と答えて、

「しかし、これから仕事がありますので失礼します」

と去っていくだろう。

「リア大将軍は、何考えてるのか、ちっともわかんない」

「それもよおく判るぜ」

確かなのはウォーレンと馬が合わないという事だから、実は一途で堅実なタイプなのかも知れないが。

「セフィーロ副官は、朴念仁」

「……そうだな」

多分、そろそろ結婚しないとまずいかなという年になったら、見合いでもして結婚するのだろうと思われる。

「ヨナ宰相は多分、既に悟りを開いてる」

「ああ。恋って何か聞いたら、辞書を開きそうだぜ。いや、全項目、暗記してるかもな」

「もしくは、哲学書を開くかもね。
ラファイン大将軍は、多分、クロウさんと同種」

「身分があるだけあって、更に難関だろうな」

「ローベルグさん、論外」

「おいおいイアリス、あのスイカみたいなお腹が可愛い～って意見

があるかもしれねえぞ？」

それには答えないイアリス。

「わかんないのが、ラファイン大将軍の副官2人とライアルト副官ね。

シュタッヘル大将軍と、もう1人の副官、ドライグ副官は既婚者だけど……もうオヤジ」

「じゃあ、その3人。ラファインの副官2人とライアルトってのを当たるか？」

「当たって砕けてみましょっか。

……あと、アドバイザー以外でも協力者が必要だわ。てか、ツテが無いとその3人には会えないから」

「取り敢えず、エレイズとウォーレンを取り込んだらどうだ？

エレイズはフレアを可愛がってるしよ、ウォーレンはゴシップのネタになってるが、本人も多分、ゴシップ好きなタイプだぜ」

「オーケー。その線で。

明日の夕方、迎えに行っていいかしら？」

「おう、待ってるぜ相棒」

ここに作戦は開始した。

「……という訳なんです、エレイズ参謀長」

イアリスの話を聞いたエレイズは……。

身体をくの字に曲げて、口を押さえて笑っていた。珍し過ぎる。

「……はあ」

大きく深呼吸して、まだ笑顔で頷いた。

「いいよ、協力する。ウォーレンにもすぐ連絡、とるね」

「楽しそう……ですね？」

「だって、シュウが恋愛で悩むなんて。それに、フレアのド天然っぷりが想像できるなあ……。ねえねえ、ジェイドとセバスチャンも誘おうよ」

「へ？　てか、ジェイドさんはともかく、セバスチャン隊長には冷徹な笑顔という刃物で斬り殺されますよ！？」

「あはは、凄い例え。でも、面白い事になると思うんだ」

さしものイアリスも元上司であり、女神も吃驚の美しい笑顔の参謀長には逆らえず。

「……じゃあ、その辺りはお任せします」

「うん。フェーン、レイル、ライアルトにはすぐ連絡を入れておく

ね」

「ありがとうございます」

イアリスは礼を言って頭を下げると、相棒の元へ向かった。

「……て、コトになったわ」

「大連盟が出来つつあるって訳だな！」

「何か、大袈裟になりすぎてる気もするけど」

イアリスが微妙な表情で言うと、クーファは笑った。

「王国軍総司令官関係なんだ！　大袈裟じゃないぜ！」

「ていう考え方もあるけどねえ」

常識人のイアリスは、ちょっと戸惑っているのだが、発案者は自分。最後までやり抜く義務があるというものだ。

＊

翌日、早速イアリスとクーファは、フェーンと面会の時間を手に入れた。彼は王城に来る用事があったそうで、その次いでに来てくれるという有り難い話だった。……というか、エレイズの気合いの入り具合が窺える。

「どうも、すみません。お忙しいところを」
イアリスが謝ると、フェーンはにっこりとキラキラの笑顔を向ける。
「大丈夫ですよ。で、僕に聞きたい事って？」
「……単刀直入にお聞きします」
イアリスは、キラッキラの笑顔に負けないように気を張って言った。
「恋愛経験はおありですか？」
相手は、少なからず驚いたようだが、すぐに笑顔を戻す。どうやら、石像のようなしかめっ面が標準装備のセフィーロとは真逆に、夜空の星のような笑顔がフェーンの標準装備らしい。
「まあ、大人だしね。多少はあるよ……？　どうしたの、そんな事」
イアリスに代わって、今度はクーファが説明した。
「成る程ね……」
「もし、フェーン副官殿がシュウならどうしますか？」
イアリスが期待を込めて聞く。

「ううんとねえ……。僕、付き合ってくれと言われてそうした事はあっても、自分からアクションした事はないんだよ」

ガクっ……と肩を落としたイアリス。クーファも引っ繰り返った。

「まあ、でも僕が思うには、シュウ君をその気にさせるのが肝心なんじゃないかなあ？
自信を持たせてあげるようにすれば」

「……シュウに自信を、ですか」

＊

「レイル副官殿……あの、すみません、お呼び立てして……」

翌日、フェーンに言われてイアリスとクーファを訪ねてきたレイルはというと斜め下を向いたままで中々言葉を発しないどころか顔を上げてもくれないので、1人と1匹は戸惑っている。

「そ、そのよお……レイル？　機嫌、わりいのか？」

「大丈夫」

『やっと喋ったっ！！』

低くて、どこか投げやりな喋り方だが、それでも口はきいてくれるようだ。

……しかし、こんな相手に昨日のフェーンに対してしたような質問をいきなり出来るわけがなく。説明から入る事にした2人。

「……という訳なんですけど」

「仲良し？」

「フレアとシュウが、ですか？」

イアリスは、何と言うべきか考えて、頷いた。

「友人としては、相当、縁が深いと思います。でも、シュウはフレアに恋してて、フレアはシュウを良い友人としか思ってないところに問題があるんです」

「……」

この沈黙はどうやら、考えてくれているようだ。

「教えてあげる」

「フレアにですか……。確かに、それが一番、早いのかもしれないですけど……。フレアが信じるかどうかが問題なんですよねえ。あの子、鈍いを通り越して、色恋沙汰に関しては無知もいいところですから」

「ラファイン様……」

「成る程、ラファイン大将軍みたいに嘘偽りと無縁な方に頼む……

ですか。でも、大将軍にそんな事を頼むのはちょっと……」

「王国軍総司令官」

「ですけどねえ、フレア。だけど、実際はフレアの問題というよりシュウの問題なんですよ。まあ、ラファイン大将軍なら引き受けてくださりそうですけどね」

クーファは呆然としていた。

完全に、イアリスはレイルの通訳である。というか、何故、レイルは単語または単文しか喋らないのか。必要な事しか喋らないどころか、必要な事も極端に単純化して喋っている。

「取り敢えず、参考にさせていただきます。ありがとうございました」

イアリスが言うと、レイルはようやく顔を上げた。

『え、なんていうか、意外……』

イアリスは思わず凝視してしまった。

男性にしては珍しい、前下がりボブの黒髪。黒く真っ直ぐな髪に縁取られた顔は細くて繊細そうな雰囲気。黒い目は、影がある不思議な魅力を放つ。

『やだ、ちょっとタイプ……て、私！　何を考えてるのよ！　フレアとシュウの恋愛問題を解決するのが狙いなんだから、余計な事を考えない！』

自分を叱咤したイアリスであった。

＊

「フレア、ちょっと、クーファ借りるわよ」

「え？　うん……最近、どうかしたの？」

フレアはイアリスの突然の申し出に首を傾げる。

「いや……ちょっとね」

「まあ、全部お前の為だぜフレア！」

「ちょっと、余計な事は言わないでクーファ」

「んじゃ、行くか」

「てことで、失礼します総司令官閣下」

イアリスとクーファは、また突然出て行った。

＊

今日、イアリスとクーファはシュタッヘル城に直接赴き、ライアルトと話をする約束をしたのだ。

「ったく、俺様を呼びつけるだなんてそのライアルトってやつあ、大層なご身分だな！」

「かなり有名な、無国籍の傭兵だったんだけど……。今回、シュタッヘル軍副官に任命されたのよ」

「何でまた」

「セフィーロ副官の推薦だって」

「ううむ。なんつーか、意外だな」

「私もそう思うんだけどね」

無国籍で、ただ1人の主を持つことのない傭兵という職業はどう考えてもセフィーロの歩んできた道のりと合致する点が無いように思えるのだった。

イアリスとクーファは、小さい応接スペースに案内されてライアルトを待っていた。

そして、対面の時。

「初めまして」

ゆったり微笑む、美女のような美青年。金髪きらきらというのはフ

ェーンと同じだが、破壊力が違う。フェーンが幸せを運んでくれる妖精さんならば、ライアルトはその美貌で全てのものを失墜させる悪魔その人のような……。

「お初にお目に掛かります。お呼び立てして申し訳ないです」

「構わないよ、可愛いお嬢さん」

イアリスは背筋がゾクゾクッとした。美貌に撃たれて……ではない。無論、それもあった事は否定できないが、苦手意識によるものが大きい。昨日明らかになったように、イアリスが魅力的と感じるのは物静かすぎるくらい静かで、影を背負っているどころか影そのもののようなタイプなのであり、太陽を背負った神々しい美青年ではない。それから、お嬢さんと呼ばれるのは、なかなかに嫌いだ。

「それで？　何か、王城で面倒事が起きてるそうだけど？」

少しは説明が行っているらしい。

イアリスとクーファは揃って頷いた。

「ふうん、確かに大変そうだ」

これは、心から同情してくれているらしい。大抵の女性にとっては、一撃必殺の魅力のこもった瞳をちょっと細めている。

「ライアルト副官がシュウならどうなさいます？」

「僕が、シュウ君ねえ」
「お前みたいなヤツは、恋愛なんてお手のものなんじゃねえか？」
クーファの方を見て、ライアルトは困った顔をした。
「僕より美しい女性というのが、今までにいなくてね。恋愛なんて考えた事も無いな」
「「え……」」
「そう恋……なんて不思議な言葉だろう」
「「は？」」
完全に自己陶酔している。
「この、今、僕の胸を焦がす気持ちの正体が恋なのだとしたら……。いやしかし、そんな易い言葉で表したくなどない。そう、もっと崇高な……小さな1人の人間の理解など遙かに超越したこの気持ち……」
「おいイアリス、これ、何だ！？」（クーファ、超小声）
「わかんないわよ！」（イアリス、同じく）
「この自己陶酔っぷり、流石、最強の剣士だな」
「それ関係ないわよ。てか、戻ってこないわね……」

「（俺達の）理解を遙か超越してるのは、当人だぜ」

「全くね。てか、誰のこと考えてるのかしら……」

「ああ、セフィーロさん……」

「「これで失礼しますっ！！！！！！！！！！」」

イアリスとクーファは、脇目もふらず、部屋を飛び出した。

## 王城恋愛騒乱１（後書き）

ライアルトに関しては、言ってるだけなので。ご安心を（何が）。

## 王城恋愛騒乱２

「で、どうする？」

「そんな面白そうな事に、関わらん訳が無いだろっ！！」

「だよねえ」

エレイズは、思った通りと笑い、ウォーレンは最近、退屈極まる毎日だったのでやっと面白い事が起きたと大喜びなのであった。退屈極まる、またはヒマという言葉が彼の口から発せられるのは単にローベルグとリザが彼の仕事の肩代わりをさせられているから……という事は彼にとって罪悪感にも何もならない。

強い上司が良い上司とは限らない事の典型例である。

「で、他は？」

「同盟の発足者がイアリスとクーファ。多分、フェーンとレイルが協力してくれるんじゃないかな？　ライアルトはわかんない」

「ライアルトは却下っ！！！！！　俺は、あいつの存在を認めんっ」

「いや、存在はしてるから」

「あいつが俺よりハンサムな訳がないっ」

「あ、悔しいんだ」

「俺はあいつに捕まって、魔力封印具の所為で力が出せずエレイズにおんぶにだっこの上、セフィーロに冷たい目で見られてなんていないっ」

「過去の改ざんをしないの」

……つまり、ライアルトはウォーレンの順風満帆人生において、初めての「天敵」なのである。しかも、超強力な。

ライアルトの方は、誘拐したウォーレンの事は綺麗さっぱり忘れて、ついでに結構美人だなと感心したエレイズの事もさっぱり忘れて、セフィーロの記憶しか残していない事は当然ウォーレンの知るところではない。

そして、後にも恐らく先にもこれしかない奇妙な連盟が成立したのである。

＊

ラファインのウォルテーナ城にて、【フレアとシュウをくっつけて、シュウに仕事をさせよう】同盟が第一回集会を開いた。城主のラファインは、奇妙なメンツが集まってきているので首を傾げたがフェーンが

「国家的問題を解決するために、みんなで知恵を絞ろうという話でして」

と説明したので、素直で優しい彼は納得して快く場所を貸してくれた。

「何故、こいつがここにいるっ！！」

「麗しのエレイズ参謀長に呼ばれたからね」

激昂するウォーレンと、つんと澄ました顔でこれみよがしに美しい金髪を揺らしてわざとらしくエレイズの肩を抱くライアルト。

「このやろうっ、その手を離せ！」

「おや、エレイズ参謀長はあなたのものなのかい？」

「上級の美人までは個人所有を認めるが、上の上の上を遙かに超える美人は人類共有の財産だっ！！　国宝に手を触れるな、王国軍に取り締まらせるぞ！！」

この2人が大暴走しているのは、唯一、立場上この2人を一喝出来るエレイズに口論を止める気概が無く、他の者は手をこまねくしかないからだ。ようやっとフェーンが

「まあ、落ち着きなさってください。ラファイン大将軍が驚いて飛んで来ちゃいますよ」

と言ったので、渋々、黙ったウォーレンと未だにすまし顔のままの

ライアルトは着席した。

ちなみに、止まるきっかけになったラファインは執務室でよく内容の聞こえない大声を聞いて、会議が白熱しているようで何よりだと考えていた。上品で常識的なラファインにとっては、会議の本筋と離れた口喧嘩など想像上の産物だ。

「進行は私でいいの、イアリス？」

「はい、というか寧ろ心の底からお願いします」

イアリスはいたたまれない気持ちで言った。隣にクーファがいなければ、すっ飛んで帰りたいところだ。一番立場が近いのがジェイドであるが、彼はセバスチャンの腹心である。イアリスにとって得体の知れない人物。……意味が無いとしてもエマを呼べばよかったか。というか、結局、みんな意味が無いのだ。

ちなみに、セバスチャンは仕事を休んでまでこんな所に来る道理はないと突っぱねたそうだが

「まあ、裏で色々と手を打つ必要があるならばいつでもジェイドを通してお伝え下さい」

とも、恐ろしい笑顔で言ったそうな。

「まずは問題点だけど。１つ、フレアが日頃あれだけツッコミの腕前を発揮してるのに自分の事に関してはド天然だという事」

イアリスとクーファは大きく頷いた。

「次に、シュウが予想外にシャイボーイだったという事。それから、シャイボーイがすっかり弱気になって、仕事も手に付かなくなってきて、仕舞いには相手の好みを知る魔法を開発しはじめたという事」

「まあ、惚れ薬の開発を始めなかっただけましと考えましょう」

ジェイドが苦笑しつつ言った。ごもっとも。

「シュウの魔法開発の腕は、俺にも並びそうで残念ながら並ばないくらいだぞ。もはや、その魔法が完成するのを待って、全員でシュウ大変革を行えばいいんじゃないか」

と、ウォーレン。

「ああやだ、自己主張の強い人」

「ライアルト、お前ええっ……。俺と喧嘩したいのか？　ああそうだな、そうなんだな！？

相手になるぞこのやろうっ、表へ出ろやああっ」

「落ち着いてくださいっ、ウォーレン大将軍！！」

フェーンの声が裏返った。

ライアルトはそんなの気にも留めず、続ける。

「それにね、フレア王国軍総司令官の好みがウチのシュタッヘル大将軍みたいなナイスミドルや、天を突くような大男だったらどうするんですか」

的を射ているだけ、腹が立つものである。

ちなみに、流石のライアルトも自分の大将軍に（だけ）は敬意を払う。それに、男性からの優しい眼差しを受けた事がないライアルトは、優しい親類のおじさんを思わせるシュタッヘルが割と好きなのだ。

「やっぱり、真っ正面からいかせるしかない？」

「だけど、シュウはどちらかというと裏で密かに笑いながら人を掌の上で転がすタイプです。そんなのに真っ直ぐとか、正面とか……」

イアリスの描写には容赦がない。

「裏からひっそり」

と、レイル。

「私達が協力して、裏……外堀からがっちり固めていくという事ですか？」

イアリスの通訳にこくんと頷いたレイル。フェーンが目を丸くした。

「凄い！　凄いよイアリス！！　君、是非ともウチに来て通訳の仕事をしてくれない！？」

「流石、情報局員だね。僅かな情報からその本質を読み取るとは、なかなかやるじゃないか」

ライアルトまで感心したように言うからイアリスは曖昧に笑うしかない。

それから色々と意見が出たり、ウォーレンＶＳライアルトが勃発したが結局はシュウの性質に合わせて

【密かに裏から支援しつつ、様子を見てフレアの心が傾き始めた頃、自然にかつ判りやすく気持ちを伝える作戦】

に決まった。作戦名が長すぎるので略称はＨ（密かに）Ｓ（支援）＆Ｗ（判りやすく）Ｔ（伝える）作戦。

ここに、【ＨＳ＆ＷＴ作戦】が始まった。

＊

「いいか、俺様が調べ上げたのは以下の事だ」

手先が意外に器用なイアリスに頼んで、作ってもらったダテ眼鏡を掛けて書類を読み上げる【ＨＳ＆ＷＴ作戦】情報関係主任（笑）のクーファ。

フレアの好きな物から、苦手な物、恋愛観からまだ気が早すぎるが結婚観まで様々。

「そんでもって、好きなタイプが発覚した！」

「……シュウ、魔法なんて開発しないでクーファに聞けば良かったんだ」

ジェイドが呟く。

「年下、同い年よりは年上」

「えーと、シュウが今１９でフレアが１７？」

イアリスに情報関係主任は頷く。

「ロン毛はあんまり好きじゃない」

「……切らなきゃ」

と、エレイズ。シュウは、始めから長めの髪だったが、ずっと切らずにいたのですっかりフレアより長い。フレアはちなみに、髪を伸ばした事がない。

「熱いのよりはクールな紳士」

「クールだけど、紳士じゃないわ。似非好青年が代名詞だから」

ううん……と、イアリスが考え込む。

「背は別に高くなくていい」

「ああ、これは良かったね。シュウ君」

穏やかにライアルト。

「仕事が早い、出来る男って素敵」

「仕事はやれば早いし、ノーミス記録保持者よ」

イアリスがちょっと気を取り直す。

……そこでエレイズが重要な事を突っ込んだ。

「それ、クロウじゃない？」

全員が一斉に黙り込んだ。

「えーと、エレイズ参謀長、ご説明を願えますか？」

新参者のライアルトにエレイズは丁寧に説明する。

「フレアの補佐官やってる、もと私の部下でフレアの上司だった子。ええと今、２３だったかな。女の子みたいに綺麗な顔で、髪はこの

辺まで」

エレイズは耳の上から首の付け根まで手を動かした。

「物静かだけど、丁寧で老若男女誰が相手でも親切。小柄で、背丈は私よりちょっと高いくらい。リアの所為だけど、すっごく働き者で仕事の処理もダントツに速い。多分、王国軍になってからも変わってないはず」

「僕がお嫁さんに欲しいぐらいです」

フェーンの冗談に付き合うだけの心の余裕は、誰一人として持ち合わせていなかった。フェーン自身も、動揺を紛らわすために口にしたのだ。

もう1人、完全に動揺したイアリスが立ち上がる。

「すぐにクロウ隊長について洗い出さないと！！　それからフレアの真意もっ」

「お、おう……じゃあ、それは……」

「よし、クロウについては俺が動こう」

ウォーレンが不敵な笑みを浮かべて言った。

「じゃあ、クーファはそれとなく聞いておいて。……念のため、イアリスも同行。あ、エマを誘って単なるガールズトークの雰囲気を強めて」

エレイズの指示にイアリスとクーファはしっかり頷いた。エマは、戦闘よりも文官職の方が向いていると判明して、現在はエレイズ参謀長の下で働いている。

【ＨＳ＆ＷＴ作戦】に予想外の障壁が現れた……かもしれない。

＊

「よお、クロウ」

「ウォーレン大将軍、ご無沙汰しております」

４５度の礼をするクロウ。

「時間あるか？　ちょっと飲みに行かないか」

「大変申し訳ありませんが」

「いやいや、今すぐじゃねえさ。今日の夜とか、明日以降とか……」

「真に勝手ながら、今晩８時以降でしたら御同行可能です」

「ならそれでいい。ここに来てくれ」

ウォーレンは、夜の街の呼び込みの青年並みに格好つけた仕草でメモを渡した。住所が書いてあるそれを受け取るとクロウは再び一礼する。

「それでは、８時に向かわせて頂きます」

「おうおう、気楽なカッコで来いよ、若者。軍服とかスーツとか無しだぜ」

クロウは、まさかウォーレンは自分に彼の趣味（子供の耳を塞ぎたくなる夜のお遊び）を教えるつもりかと疑ったが、そこまで天下の大将軍を疑ってはいけないと自身の思考を戒めた。

……実は、ウォーレンはクロウを気に入って、弟分にでもしてやろうという気持ちがちょっぴりあり、もしも【ＨＳ＆ＷＴ作戦】の計画が無ければクロウの脳裏を過ぎった通り、不埒な世界にこの純情な青年を引っ張り込もうとしたかもしれない。

＊

「エマ、おいで」

「は、はいエレイズ様！」

エマは身体を５０度くらい曲げて、書類と格闘していたが背筋をピーンと伸ばして上官を振り返り見た。もう大将軍じゃないんだから、「エレイズ様」じゃなくて「エレイズさん」とか「参謀長」で良いんだよ……と言われていても、一向に改善できないエマである。というか、誰にも出来ないのだ。今日こそはと思っても

『ああっ……女神様』

と、その姿に感動している内に「エレイズ様」と口走っているのだった。

「どうなさったので？」

「フレアの事で、ちょっと相談」

「フレア……ですか」

エマの目はきらきらしている。元より、こういう話が大好きな、いわゆる普通の女の子である。自分の恋が一向に実らないし、周りにもそんな気配が無いのでつまらないなと思っていたところで降ってきた話。乗らないわけがない。

「フレアの意図を確認すればいいんですね？」

「そう、イアリスが良いタイミングを見計らって、迎えに来るから」

「判りました！

ううん、クロウさんかシュウ君、かあ……私ならクロウさんなんですけど。あ、あ、クロウさんが好きって事じゃないですからね！？」

エレイズはくすくす笑う。こういう言動は自分に一切ないものだから、可愛く見えて仕方がない。

『こんな可愛い子が、遊び人に夢中なんて……。此の世って厄介。黒いロン毛が好きなら、ヨナでも紹介してあげようかな。その方が確実に幸せに……』

「エレイズ様？」

自分をじいっと見て考え込んでいるエレイズに、些か不安げにエマは呼びかけた。

「ごめんね何でもない。
じゃあ、宜しく。エマも今日から【ＨＳ＆ＷＴ作戦】の参加者だね」

「それって、他に誰がいるんです？」

「発足者がイアリスとクーファ。フェーンとレイル、ライアルトがいて、私がウォーレンとジェイドを連れ込んだ」

「ウォーレン大将軍も……！」

「仲良くなるチャンスかもね。会合には勿論、連れて行ってあげる」

「やったあ！　……あ、すみません」

顔を赤くしてうつむくエマ。

可愛いんだからもう、と思うエレイズだった。

＊

「よお、来たな」

「お待たせしました」

「1分も待ってねえさ。それより、こんなところで上下関係、気にすんな！　気楽に喋れ、命令だ」

「……わかりました」

ウォーレンとクロウは、並んでカウンター席に座った。ここは、王都の中でも人気が高いバーである。ウォーレンは1分しか待っていないと言っておきながら、既に真っ青なカクテルを注文していた。全体的に暗い店内で、一昔前の音楽がゆったりとしたリズムを刻んでいる。カウンターは黒で、椅子も黒い革張り。カウンター席には１０名弱が座れるようで、その後ろには４つのテーブル席がある。

「何を飲む？　俺がおごってやる」

「ありがとうございます……。では、お任せします」

クロウは、……真面目一本の仕事人で、睡眠薬の代替品としてしか酒を飲まないくらいなのでカクテルの名前など判りはしない。

「強いか？」

「弱い方かと」

ウォーレンは、にやりとした。どうせなら、酔わせて、色々と赤裸々にしてやろうという、とんでもない上司と化している。

「マスター、アイス・ブレスをこいつに」

「はいよ」

マスターはバーとカクテルがやけに似合う、美青年に感心しつつ、痩せた身体も同時に確認して心配そうな表情を一瞬見せたが何も言わずに作り始める。

アイス・ブレス。“氷の吐息”といういかにも、唯、氷の魔法使いのクロウに合わせただけだと思われるような名前。乳白色のカクテルは、香りも余り強くないものだからアルコール度数が弱いと考えがちだが、とんでもない。酒豪でもなければ、１杯で頭が完全にぼんやりしてしまう。

「最近、総司令官殿の調子はどうだ？」

「始めのうちは大分戸惑われていたものの、近頃では色々な事……総司令官という立場にあられる事、そのお仕事にも慣れてきたようです。軍人となってから、ずっと共にいたクーファが常に傍らにいるという事も良い効果となっていると思います」

ウォーレンは、ちょっと鎌を掛ける。

「クーファだけか？」

「まあ、王国軍にはエレイズ軍の出身者が多く、顔見知りが半数ほどを占める事は大きいのでしょう」

模範解答である。このクロウという青年の頭には、全ての問いかけに対する回答例が全てあらかじめ用意されているのではないかと、途方もない事を疑いたくなってくる。

『だったら余計、酔わせないとな』

「どうした、止まってるぞ？　飲まないのか」

「あまり飲んで、倒れでもしたらウォーレン大将軍にご迷惑を掛けてしまいますので」

「お前なあクロウ、無礼講でいこうぜ！　なあ。無礼講って意味わかるか？　上司のヅラ取っていいんだぞ？」

「それとこれとは話が別のように思えますが」

敬意と礼儀は別であり、いつどんな状況でどんな相手に対してでも礼儀を欠いてはいけないというのがクロウの考えである。

「お前から見たフレア総司令官はどうだ？」

「あの地位にありながら、生活態度も礼接も崩さないのは素晴らしき事と思います。総司令官の仕事、とはいっても下の者が片付けても差し障りない仕事は少なくないですが、部下に甘んじようとしない心がけはご立派です」

「へ……へえ、そうか」

ウォーレンにしてみれば、耳が痛すぎる話である。今も恐らく、リザが暴言を吐いて、ローベルグはそれをなだめるのも疲れ、無言でこつこつと仕事を片付けているのだろう。

しかし、今、この時は耳に痛いと思っていても帰るとすぐさま忘れてしまうのがウォーレンの欠点だ。

それから暫く、他愛のない話を続けていたのだが、クロウの最初のような……アイロンを掛けてのり付けしたような返答に皺が寄ってきたのでウォーレンは本題に入る。

「そういえば、お前、女はいるのか？」

単刀直入というか、あけすけというか。上品とは言い難い。

「女……というと？」

「あーもう、判れ、大人だろ？　恋人いるかって話だ。カ・ノ・ジョ！」

「いません」

あっさりしているところを見ると、それを引け目にも思っていない事が判る。

「お前、どうすんだ、もう２３だろ。俺がそういうところに連れてってやろうか？　常連だから、俺の紹介なら結構……」

「失礼ながら」

酒の所為か、ウォーレンの下品な言葉を遮ったクロウ。

「軍人たるもの、任務以上に優先させるべきものは存在しないと考えます。戦に恋人が必要というのならどうとでもしますが、そんな話は聞いたこともありません。事務職であっても同様。古来より、酒と異性と贅沢は個人を堕落させるものとして有名であります。そ

のどれも、私は欲しません。何故なら、堕落した生活、人生など御免こうむるからです」

「おいおい、そんな顔して生まれてきたくせに勿体ない事言うなって！」

「私がこの顔で生を受けたのは望んでの事ではありませんし、それにより恩恵を被った事は余りないと記憶しています。また、快楽に興味を持たぬ事が勿体ない、とは私は考えません。
厳しく己を律し、堪え忍び何かを得たときにこそ、真の幸福というものが手に入るのだと私は考えておりますが。ウォーレン大将軍はきっと、反対なさるのでしょう。ええ、構いません。非難するつもりで申し上げているのではないのですから。１つの、違った考えがある事をお示ししているだけです。どうか、余りお気になさらずに」

ウォーレンは、失敗を悟った。

クロウは酔って、ボロを出すのではない。酔うと、より一層、意固地になって更に遠慮という自己抑制が外れるため彼の本質である潔癖主義が全面に押し出される。そして、饒舌にもなるようだ。

『……酒無しで仕切り直した方がよさそうだ』

## 王城恋愛騒乱３

「……馬鹿」

エレイズの感想は、その一言であった。

「やっぱ、任せてられない。次は私がどうにかする」

ウォーレンは、微妙な気分でエレイズを見た。任せておけと言い放った手前、ちょっとばかり情けないと思う気持ちがあり、もう１つ、エレイズは一発で成功させそうな気がするのだ。エレイズも、潔癖なところが多い。修行僧のようなクロウに比べたら確かに、大分、俗っぽいがユエ以前も以後も男の噂は１つとして無い。同じ立ち位置から相手の心情に踏み込めるように思える。

「……判った、任せた」

「うん。あと、当分はクロウに近付いちゃ駄目。元とはいえ、私の可愛い部下を酔い潰させたりして」

「……はい」

２日連続で、２人の氷の魔法使いに氷漬けにされたウォーレンだった。

＊

「あ！　エマ、久し振り」

フレアはイアリスと一緒にエマがやってきたので、目を丸くした。
「えへへ、久し振り。もー、すっかり偉くなっちゃったんだねえ」
「別に、偉いとか……」
「まあ、それはおいといて！」
イアリスがクーファと一瞬、キラリと視線を合わせてから仕切り直す。
「ロザリア局長からお菓子貰ったのよ。食べない？」
「あ、だからエマも誘ったんだ。うん、食べる、食べる」
こういうところは、17歳の少女だなあと妙に感心したクーファだった。

「エマは、未だにウォーレン大将軍追っかけてるわけ？」
イアリスは自然に切り出す。
「ううっ……でも、全然会えなくて」
「良い噂聞かないわよ？　特に、女性関係」

「う、噂だもん！」
９９％ほどが事実なのだが、恋する乙女にはゴシップなど効果が無さそうだ。
「あ、そうだフレア」
エマが逃げるように（つまり自然に）フレアに話を振る。
「カレシ候補いないの？」
「エヘンッ、ゴホッ」
「また砂糖菓子でむせてるし……」
イアリスの脳裏に、前回の光景がフラッシュバックした。
「いやあ、あたしにはそういうの無縁っぽくて」
「えー、クロウさんと超お近づきになってるでしょ？　何かなさそう？」
「ないないない、絶対ない！」
「ない言い過ぎ」
イアリスのツッコミには構わず、フレアは述べる。
「だって、クロウさんって修行僧みたいな人なんだよ？！　１分遅刻しただけで、此の世の終わりみたいに謝るの。何人か、王国軍の

女性騎士に仲介してって頼まれたんだけど……」

「だけど？」

「仲介した次の日、どうだった？　って聞いても、『私には無理でした。壁、高すぎます。プロのアルピニストでも上れっこないです……』っていう答えが。具体的にはどういう事か、よくわかんないんだけど」

イアリスとエマは顔を見合わせた。

女性紹介までしているところをみると、どうやらフレアはクロウを狙って「好みのタイプ」を並べたわけではなさそうだ。

「まあ、好みのタイプがそのまま好きな奴とイコールになるとは限らないからな」

クーファも同じ事を考えて、しみじみと言った。

「え？　何のこと？」

首を傾げるフレアに、収穫無しか、と2人と1匹は肩を落とした。……だが、転ばされてただで起きて、すごすごと帰るわけにはいかない。

「ほんっっとに、興味のある人とかいないの！？　ちょっと良いなあってのでもいいんだよ！？」

「な、何でエマ、そんなに必死なの！？　大丈夫だよ、あたし、ウォーレン大将軍には興味なんて無いからね？」

「私達は、あんたの心配をしてるのよ」
エマが押す係、イアリスが諭す係。
「え？」
「地位も名誉もあって、部下にも相棒のドラゴンにも友人にも恵まれてるあんただから、それですっかり満足してしまうんじゃないかって心配なわけ。
結婚するのが女の幸せとか、原始時代の考えを信仰する訳じゃないけど。恋くらいしたら？」
フレアは困ったような顔をして、最終的には申し訳なさそうな顔をした。
「ごめん……。でも、そういうの、わかんなくって。
イアリスもきっと、いい人がいるんだねえ」
「……え゛ッ」
イアリスの今まで出したことの無いような、動揺に充ちた声にエマが大反応を示す。
「え、もしかして、もしかするの！？」
「もしかしない！　ちょっとエマ、私達はフレアの心配をしてるの！　私の話してどうすんのよ！」
「恋は誰の恋であっても大事よ！」

「お黙りなさい、恋愛病重症患者として新しく王城に入った薬草師のレイファさんのとこに連れてくわよ！？」

エマは、不満そうに頬を膨らましたが、義務を思い出して黙った。

「ねえ、フレア、シュウ君はどうなの？　仲良いんでしょ？彼、結構、素敵じゃない！　端正な顔してるし、……時々黒いオーラが見えるけど、基本、爽やか笑顔だし。もし、ちょっと考えてるなら私とイアリスが応援するよ？」

「な、何で、イアリスもエマもこの前からシュウなの！？」

フレアの全うな問い返しにも動じないイアリス。

「それだけ、仲睦まじく見えてるって事」

「六つマジック？」

「「「誤変換っ！！！」」」

エマとクーファもツッコミに参加するとは珍しい。

「あんたの脳内が心配だわ、私」

イアリスは心から言って、溜息をついた。
「そういえばさ、じゃあ……」
フレアは首を傾げた。
「シュウはどうなの？　モテルんじゃない？」
3者は瞬間的に目で会話して、作戦を決定した。
「シュウ？　無理よ無理！　あんなん、顔が可愛いだけで近付いたら毒牙ぐっさりよ」
「そんな事ないよお、結構優しいよ？」
「騙されてるのよエマ！　ね、クーファ？」
「ううむ。あいつの本心ほど分かりにくいもんはねえからな。なあフレア？」
「うーん。確かに判りづらい、かも」
「でも、そのミステリアスな感じってちょっと素敵じゃない？」
「ミステリアスねえ。ミステリアスというより、道化者って感じがするわ」
「道化者って、ちょっと酷いよお」
「何、あんたエマ？　ウォーレン大将軍一筋じゃなかったわけ？」

「そ、そんなんじゃないよお！　それに、シュウ君って絶対、好きな子いるって！」

「へ？」

フレアが首を傾げた。２人と１匹の目が光った。

「シュウ君のタイプってどんな子だろ？」

「まあ、あいつと向こうを張れるくらい黒くないと駄目なんじゃねえか？」

「はん、これだからトカゲは！」

「おいこらイアリスーっ！！」

「真っ黒なヤツだからこそ、相手は真っ白の方がいいんだって。真っ黒と真っ黒だと、同族嫌悪が生じるでしょ？　ウォーレン大将軍とライアルト副官が良い例よ」

「真っ白……純粋……。単純？」

「そうとも言えそうね。あと、あいつ、貴族っ子は嫌いよ。それだけは公言してた。あと、頭の良い子も苦手ってね」

「あはは！　もしかして、フレアー？」

『『エマ、上手い！』』

イアリスとクーファは無言で称賛メッセージを送った。

「ええ！？　あたしって、そうなの！？」

全員で頷く。

「純粋で、単純で、平民で……ちょっとボケてて。結構、あいつの知識披露欲を満たしてあげてるんじゃない？」

「……まあ、あたしの知らない事をシュウが知ってる事は多いけど。だけど、シュウより知識が少ない人なんて山ほどいるよ？」

「他の条件を満たしてるかっていうと、そんなにいないわ。いける、いけるわよフレア！」

「イアリス！？」

「フレア、あのね。付き合うまで、相手の魅力が判らなかった……って話はよく聞くわ。だけど、最終的にはお互いに夢中になっちゃったり（うっとり）。でなかったら、お見合い結婚なんて成立しないわ」

「エマ！？　なんか、事が大きくなってるよ！？」

「ま、じゃあ、突撃となりの情報局だ！」

「何それ～っ！？　てか、全然、となりじゃないし！　突撃しない

し！」

＊

「……て事なんだけど。情報局の仕事円滑化の為にも、認めてくれる？」

エレイズは当初の予定と全く違う話を最後にはしていた。エレイズはコーヒー、クロウは紅茶を飲んでいる、昼下がりのカッフェ。見目麗し過ぎる2人は否応なく人目を引くが、2人の背中から発せられているオーラがどこからどう見ても「お仕事モード」なので、誤解する者は今のところ出ていない。

「私は、自分に理解出来ぬものを排除するなどという、狭い視野の人間にはなりたくないのです」

「じゃあいい？」

「それで、全てが好転するのならば素晴らしいと考えます」

エレイズはにっこりとした。それから、苦笑する。

「ウォーレンなんかを当てて、ごめんね」

「……先程申し上げましたように、私はあの方を否定するつもりはありません。それに」

微かに笑った。

「自分と違う人間というのは、……ああまで違うと、とても面白く

感じます。是非また、ご一緒させてくださいとお伝えいただけますか」

「う……うん」

些か驚いて、エレイズは目を丸くして頷いた。どうやら、未知の人間という存在がクロウの知的好奇心をくすぐったようだ。

「ただし、アルコールは無しでと」

「あはは、そうだよね」

和やかなお茶会はもう少しだけ続いた。

＊

フレアが抵抗したので、直接的な突撃は敵わなかったが、イアリス達だけで情報局副局長執務室に突撃した。

「シュウ、ちょっと入るわよ！」

ーーーー無反応。

部屋の主が机に突っ伏したまま動かない。

「ま、まさかシュウ！？」

「いやあっ、早まっちゃったの！？　シュウ君！！」

「おい、まだ早過ぎるぞっ！！　諦めるなっ」

2人と1匹は絶叫。そこで、くぐもった声が聞こえる。

「早まる……それもいいかもしれない。こんなに情けない俺、生きてる意味なんて……」

「良かった、まだ意識はあるわ！」

エマの言葉が大袈裟に聞こえるが、この状況でそう言いたくなるのは無理もなかった。

「ねえ、あんた、ぶっちゃけ、どうしたい訳？」

イアリスがシュウの前に仁王立ちする。

「イアリス、さっきまで倒れてたんだから……」

「お黙りエマ。もう、あったま来たのよ、私。遠慮なんてしてやるものですか！

さあ、言ってごらんなさい。どうしたい訳！？」

「俺は……」

しょんぼりする姿はエマとクーファの涙を誘ったが、同時にイアリスの激昂を誘った。イアリスは恋愛小説で主役が思い悩むシーンを読んで、共感して胸が締め付けられるタイプではなく、うじうじしてんじゃないわよと、怒りを覚えるタイプなのである。目の前の現実も同様だ。

「いーい？　ここ最近のあんたがおかしい事は理解してるわね？」
「でも……どうしようも……」
「お黙りっ」
「イアリス、質問してなかったっけ？」
エマが控えめに突っ込んだ。だが、イアリスは容赦しない。
「しっかりなさいっ！！　あんたがそんな調子で仕事に手が着かないからこっちは大層困ってるのよ。この際、何でも手伝ってやるわ。お膳立てだって邪魔者の削除（デリート）だってやってやるわ！
ほら、言ってごらんなさい。どうしたいの！？」
「おいおい、イアリス、削除（デリート）はよお……」
「お黙りクーファ！　あんたならどうとでもできるでしょ」

イアリスにもはや睨まれ、エマとクーファに心配そうに見守られたシュウは口を開く。
「俺は……フレアに、俺の気持ちを判ってほしい」
「判ってもらうだけでいいの！？」
バンッ、と両手で机を叩くイアリス。

……何だか借金の取り立てみたいな迫力だとエマは思った。

「いっ……いいわけないだろっ！？」

つられたか、シュウも勢いよく立ち上がった。

「だけど、ダメなんだっ、どう考えたって！！」

「お黙りっ！！　この腐っても御曹司っ！！

火傷を恐れて生きていけると思ってんの！？

甘いのよっ、全てがっ！！

絶望するなら破局（カタストロフ）を迎えてからにしなさいっ！！」

「イアリスはじゃあどうなんだっ！！

その……こっ、恋したこと、あるのかよっ！？」

「それは……。私の話は今は関係ないでしょ！？

私は、ただの恋愛に悩む少年だったら放っておくわよ！　だけどね、あんたが悩んで仕事しないと困るの！！　てか、立場判ってんの！？　左遷受けるわよっ」

恐らく、『立場判ってんの！？』が効いた。

負けたのはシュウの方だった。

「じゃあ、……それじゃあ、どうしろっていうんだよ」

再びガタンッと椅子に戻ったシュウ。

「だから言ってるでしょ」

イアリスの方も落ち着いた。

「私もエマもクーファも、エレイズ様やその他大勢もあんたの味方なの。結構、凄い布陣が敷かれてるんだから。
頼らせてあげるから、言ってごらんなさい、どうしたいの」

鬼神（取り立て屋）の如き迫力がなくなり、エマとクーファは合わせてほっと息をついた。

「俺は……」

「さあ、ここには私とエマとクーファしかいないわよ！」

「フレアと……」

「と？」

「結婚したいっ」

「「「極端っ！！！」」」

足並揃った盛大なツッコミ。

「前段階があるわよ、シュウ君。
お友達から恋人、それで結婚でしょ？　お友達段階はクリアしてるんだから、次は恋人よ」

エマが教えてあげた。

「そ……そうか、普通は婚約の前に……そうだよ、だから、親が決めた婚約はいつだって無茶苦茶なんだ。段階を踏んでないから。
エマ、君って凄く合理的な思考を持ってるね」

「そ、そういう話になるのお？」

困惑するエマ。

「まあでも、ようやく話は纏まったな！」

と、クーファ。

「ええ。目標は決定したから後は手段よ。
シュウ、ストレートに行ける？」

「……俺に真っ直ぐは……」

「ダメよね。紆余曲折した人間性だものね。私だって、それは無理だと思ってたわ。
安心なさい、計画は立ててあげる」

「イアリス……」

「あんたも当事者なんだから、そうと決まれば明日のＨＳ＆ＷＴ作戦会議に参加なさい」

「は？」

３人でざっと、組織の説明をした。

「……そんな事になってたなんて」

「面白半分が殆どだけど、私とクーファはあんたを本気で心配して始めたのよ」

「判った、行く」

「ふん、いい顔になってきたじゃない」

「イアリス程、イケメンにはなれそうにないけどね」

「イケメン！？　お黙りっ、私だって女よ！？」

「だって、俺より男らしい。
あーあ、イアリスが羨ましいなア」

「とっとにかく、判ったわね！？
午後７時にエレイズ参謀長の執務室に集合よ。それまでしっかり仕事なさい」

「判った、もう、うじうじしない」

「良くってよ！」

シュウの吹っ切れたような笑顔とイアリスの強気で不敵な笑顔がぶつかった。

## 王城恋愛騒乱３（後書き）

イアリスの決めぜりふ（笑）は「お黙り」です。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9452x/

---

炎の召喚士フレア、番外篇　【王城恋愛騒乱……】

2011年10月28日17時17分発行